

その8 酉 とり 鳥

関東の11月は「おとりさま」酉の市の季節。12日ごとの酉の日、今年は三の酉(28日)までである。少年時代、伝統芸能を意識したのは近所の大鳥神社で見た江戸神楽だったことを懐かしく思い出す。

まず清元の舞踊「鳥刺し」え？鳥の刺身がテーマ？いいえ、これは職業。小鳥を捕獲する商売。食用ではなく観賞用の鳥で羽の美しさを愛でたり、鳴き声を楽しむ人に売っていた。「刺す」といっても傷つけては商品にならない。細竿の先端に付けたトリモチでとらえる。「鳥鶺」こんな難しい漢字。「餅」ではなくモチノキの樹脂とか。歌舞伎で初演された全体は「忠臣蔵」の世界。大石内蔵助(由良之助)が祇園で放蕩する座敷が舞台。太鼓持ちが鳥刺しの風俗を描く趣向。いつしか、三味線を弾く形から男女の色恋場面にかわってゆく。そして「コンコンチキチン」と祇園祭のお囃子が入って雰囲気が変わり、四条あたりの橋で鴨川を眺めながら芸妓を連れて歩く由良之助のイメージ。さらに頬かむりして恋人の元に忍んで行く酔客の姿と、太鼓持ちが様々な人物を演じ分けてゆく。いまでは衣裳をつけず「素踊り」で上演する人気曲だが、こんな基本知識がないと、その風情がわかりにくい。歌詞には多種多様な鳥の名前がちりばめられている。



そうした小鳥を売る鳥売の夫婦を主人公にした歌舞伎舞踊は「吉原雀」長唄、清元二種類ある。吉原の仲の町場面が多い。「放生会(ほうじょうえ)」という中秋の名月の日の行事で魚、亀などを水に放したり、小鳥を空に逃がして、食事で生き物の命をいただいていることに感謝し、一年間の殺生を許してもらう日のために鳥籠に入れた小鳥を売り歩く風俗。吉原雀とは「ヨシキリ」のことだが、廓の客を指し、男女の色恋を描く踊りだ。

人形浄瑠璃や歌舞伎の「菅原伝授手習鑑」の「道明寺」という場面では「東天紅」というくだりがある。時計がない時代、夜明けを告げる鶏鳴をいった。悪者が道真公を殺すため、出発の時刻を早める。湯を入れた竹筒の上に鶏をとまらせる。体内温度があがり朝と勘違いさせるというサイエンストリック。思惑通り鳴き「それこそ鳴いたトッテンコー」という。これは道明寺がある河内、土師(はじ)ノ里では道真公との別れを惜しんで鶏が鳴かなかったという故事から創作された。

東天紅「トッテンコー」は「コケコッコ」のもじりだろうが、狂言の鳴き声は「コウコウ、コキアコウ」。「鶏賀(にわとりむこ)」といって婿入りの挨拶の仕方では嘘を教えられ舅の前で羽ばたきながら、鳴く。舅はびっくりするものの、誰かにいたずらされたと察し、同じ鳴きまねで婿を迎えるという、人間の愚かさと優しさを覚える素敵な狂言だ。

今月は、あれこれ「とりとめのない」話となった。